

平成9年12月8日第3種郵便物認可
令和8年8月31日発行（季刊発行）第172号

HI
HAIKU INTERNATIONAL

2026
No.172



俳句ユネスコ無形文化遺産
登録推進協議会

H I A 第28回俳句大会

第28回俳句大会表彰式、講演会を下記の通りに開催いたします。

- 日 時：2026年12月4日（金）
表彰式：午後1時
講演会：午後1時半
講師：井上泰至氏（日本伝統俳句協会会長）
演題：「国際俳句の誕生
——二つの大戦の間、そして虚子・健吉への影響」
- 会 場：アルカディア市ヶ谷（私学会館）
東京都千代田区九段北4-2-25 Tel:03-3261-9921
- 会 費：6,000円（軽食つき）
- 募 集 句：雑詠二句一組（海外詠も可、未発表に限る）
- 投 句 料：1,000円（定額小為替又は現金書留にて同封・切手不可）
- 応募方法：HI誌折込応募用紙（コピー可）
- 締め切り：2026年9月18日（金）〈消印有効〉
- 応募先：〒162-0843 東京都新宿区市谷田町2-7 東ビル7F
国際俳句協会 大会係 Tel:03-5228-9004
- 選 者：稲畑廣太郎、片山由美子、加藤耕子、高野ムツオ
加古宗也、能村研三、星野高士、和田華凜（50音順）
〈外国語〉木村聡雄、ディヴィッド・バーレイ
- 入選句発表：大会当日（12月4日）及びHI誌上、ホームページ掲載
- 後 援：日本経済新聞社、ジャパントائمズ社
現代俳句協会、俳人協会、日本伝統俳句協会

HIA Calls for HAIKU for The 28th Haiku Contest

Haiku Contest:

Announcement of the winning works: **December 4 th, 2026**

The judges will comment on the winning works in the HI journal.

The winning works will also appear in the HIA website.

Up to two haiku per entrant can be accepted for the entry

Note: Works already published elsewhere will not be accepted.

Entry Forms: Please use the Application form which is inserted in HI journals.

Photocopied Application form can be accepted

Please PRINT haiku clearly. Closing date: September 18th, 2026

judges: Toshio Kimura, David Burleigh

Entry forms should be sent to:

The Haiku International Association (HIA)

7 th Floor Azuma Building

2 - 7 Ichigaya-Tamachi, Shinjuku-ku, Tokyo 162-0843 Japan

TEL: 03-5228-9004

Check HIA Homepage <https://www.haiku-hia.com>

Supporters: Nihon Keizai Shimbun, The Japan Times

HI

令和8年8月31日■第172号

Aug. 31. 2026■No.172

目 次

CONTENTS

	page	
『スペインの修道院に息づく 「座」の文芸』 井尻香代子	2	
俳 句		Haiku
HI 選集①ドイツ・台湾・カナダ・ アメリカ・ヨルダン・内モンゴ ル・デンマーク・イラン	5	HI Club ① Germany, Taiwan, Canada, U.S.A. Jordan, Mongolia, Denmark, Iran
HI 選集②～③	8	HI Club ②～③
HI 選集④（自訳）	19	HI Club ④ (translated by the author)
HI 172号 投句作品より 選評 HIA 理事 西村和子	25	From HI No.172 Selection and review by Kazuko Nishimura, HIA Director
俳句が人の心をつなぐ 石狩市長 加藤龍幸	28	
後記	29	



『スペインの修道院に息づく「座」の文芸 —バレンシア国際ハイク大会記—』

京都産業大学 文化学部 井尻香代子

1. 一通の招待状から

2025年10月半ば、私の元に一風変わった招待状が届きました。それは、翌年4月30日からスペインで開催され、スペイン語圏の俳人たちが集う「バレンシア国際ハイク大会」への誘いでした。セビリア大学で日本文学を教えるビセンテ・アヤ教授を中心とし、バレンシア大学や文化協会が共催するこの大会は、今回で3回目を数えます。

会場はバレンシア郊外の町ジレにある、フランシスコ修道会のサント・エスピリトゥ修道院。3泊4日の間、生活リズムを修道士たちに合わせて静かに過ごし、食事はスペインでも高名な修道会シェフが担当するというその内容は、学術的な関心を超えて大変魅力的なものでした。

年度始めの多忙な時期ではありましたが、大学の理解と協力、そして何より「スペイン語圏の人々に今の日本の俳句の姿を伝えたい」という思いに後押しされ、私は基調講演の大役を引き受け、バレンシアへと旅立つ決意をしました。準備にあたっては、俳句だけでなく俳画や川柳も親しまれているスペイン語圏の方々に何を伝えるべきか熟考し、日本独特の「座の文芸」としての側面をメインテーマに据えることに決めました。

2. バレンシアの熱気と知の交流

大会前日、私はまずバレンシア大学を訪れ、ラウル・フォルテス教授による「日本語・日本文化」の授業を見学しました。テーマは「挨拶」でしたが、そこで目にしたのは学生たちの圧倒的な知の熱量です。20人ほどの学生たちが、自身の専門である思想、歴史、美術、文学といった多角的な視点から、鋭い質問を投げかけてくるのです。

例えば「さようなら」という言葉の成り立ちや用法について教授が解説すると、学生たちからはヨーロッパ言語との比較に基づいた歴史的・文化的背景への掘り下げや、果てはマンガやアニメから得た知識による突っ込みなど、活発な議論が交わされました。私も思わずその輪に加わり、あっという間に二時間が過ぎていきました。古代ローマ時代に遡る歴史を持ち、陽光と爽やかな風に恵まれたこの美しい文化都市で、次世代の若者たちと交流できたことは、今回の旅の大きな収穫となりました。

3. 歴史の道を越え、聖なる静寂へ

大会当日、市内から会場の修道院までは車で向かいました。海岸線を離れ、山地へと近づくにつれ、車窓には古びた砦や城跡が次々と現れます。この地がかつて、スペイン中世の国民的英雄エル・シッドが治めた王国であったという歴史の重みが、肌で感じられました。

到着したサント・エスピリトゥ修道院は、厚い壁に守られた別世界のような静寂に包まれていました。しかし、決して冷たい場所ではありません。割り当てられた居室のトイレットペーパーの端が、小さな木の葉の形に折り紙されているのを見つけたとき、その細やかなもてなしに心が温まりました。オープニングでは、再会を喜ぶ旧知の友人たちや、初めて出会う参加者たちとの賑やかな挨拶が交わされ、いよいよ大会が幕を開けました。

4. 「孤独な営み」から「座の喜び」へ

私の基調講演では、俳句が連歌や俳諧から受け継いできた「座の文芸」の本質に焦点を当てました。西洋において俳句は、しばしば「隠者が孤独の中で行う創作」と捉えられがちです。しかし私は、実際の句会が「投句、清記、選句、披講」という厳かなプロセスを経て、参加者全員が創作・運営・批評を共有する「集団制作の場」であることをお話ししました。

会場からは次々と質問が飛び出し、「この大会そのものも、スペイン語ハイクが生み出した『座を共にする喜び』の実践なのだ」という深い共感の声が上がったのが印象的でした。

続いて登壇したビセンテ・アヤ教授は、「平和と俳句」をテーマに語られました。教授は、レバノンの戦火や東日本大震災直後の福島で詠まれた句を例に挙げ、ハイクがいかにして人々の心の琴線に触れるのかを説きました。日々の生活の中で実感される喜びや悲しみ、あるいは「湧水」のような日常の一端さえもが、自然との調和の中で詠まれるとき、それは平和を守る力になる。他言語ハイクがなぜ社会的なテーマを内包するのか、その精神的な背景が解き明かされた瞬間でした。

5. 五感で味わうスペイン流の「座」

大会のプログラムは多岐にわたり、スペイン語俳文芸の「現在地」を鮮やかに示していました。エリアス・ロビラ教授による子規の『俳諧大要』の研究発表や、アヤ教授によるワークショップ、詩人のマルティン・ポルトレス氏による朗読など、知的な刺激に満ちていました。

圧巻だったのは、尺八奏者セルヒオ・バスケス氏とフラメンコ歌手ファ

ティマ・ルー氏による、スペイン語ハイクの演奏です。日本の伝統楽器とスペインの魂が融合し、言葉が音楽となって響き渡る光景は、文化の混淆の美しさを象徴していました。また、墨絵のワークショップでは、参加者たちが筆を走らせ、精神を集中させる姿が見られました。

そして、忘れてはならないのが修道院の豊かな食事です。粗織りの長衣にエプロンを掛けた修道士シェフが、腕によりをかけて作ってくださる料理は、私たちの心身を癒やしてくれました。最終日の夕食には、本場のパエリアや生ハム、チーズに地元のワインが振る舞われ、まさに至福のひとつとなりました。

6. 結びに代えて

日曜日の朝、ミサで響く荘厳なグレゴリオ聖歌を聴きながら、私は修道院の庭を歩きました。そこには、小さな十字の形をした白いオリーブの花が、ほのかに香っていました。ふと見渡すと、参加者たちは小さなノートを手にも、その場で見つけた感動をハイクに書きとめ、披露し合っていました。日本で生まれ、受け継がれてきた「座の文芸」。それが遠く離れたスペインの修道院という特別な空間で、人々の心を繋ぎ、平和を希求する確かな伝統として息づいている。その豊かさを五感で実感した、忘れがたい四日間となりました。



—— HI Club —— ①

DOI, Gisela (GERMANY / JAPAN)

●

Oh Tannenbaum, oh! –
die Studenten erfragen
mein plätzchen rezept

LEE, Che-Yu (TAIWAN)

●

Looking up at
the pale winter crescent moon –
with a haggard face

HRYCIUK, Marshall John Louis (CANADA)

●

October day
settling down to a shade
of crimson

MONTREUIL, Mike (CANADA)

●

clear stream
the emptiness
of fallen leaves

KURODA, Motoko (U.S.A.)

●

My husband Bill
ordered a second cherry tea
at NAKANO Plaza

Hoàng Thị Hoa Sen (JAPAN)

●

Spring season –
Buying the rain
Dancing

—— HI 選集 —— ①

土井, ギーゼラ (ドイツ / 日本)

●

クリスマスツリー！
学生が問う我が
クッキーの秘訣

(自訳)

李 哲宇 (台湾)

●

青白き
冬三日月の
面裏れ

(自訳)

リチューク, マーシャル ジョン ルイス (カナダ)

●

十月の一日
紅へと染まり
沈みゆく

モントリール, マイク (カナダ)

●

清流に
落葉の
移ろい

黒田素子 (アメリカ)

●

桜茶の
お代りの夫
中野プラザに

(自訳)

ホアン, ティ, ホアセン (北海道)

●

春の季節
雨を買い
舞う

WAZWAZ, Issam (JORDAN)

●
winter night –
the fox clearer
after the snowstorm

ワズワズ, イッサム (ヨルダン)

●
冬の夜
吹雪のあとの
狐の姿

HAFERNIK, Johnnie Johnson (U.S.A.)

●
live music
at the neighborhood night market
summer solstice

ハフェルニック, ジョニー・ジョンソン (アメリカ)

●
近所の夜市の
ライブ音楽
夏至の日

MOMOI, Beverly Acuff (U.S.A.)

●
learning
not to rush
mushroom risotto

桃井, ベバリー (アメリカ)

●
急がないことを
習う
きのこリゾット

(訳：桃井勝彦)

SHIMANE, Marie Annette (JAPAN / U.S.A.)

●
Clearing the garden;
Under all the old leaves –
Blooming violets

シマネ, マリエ アネッテ (日本 / アメリカ)

●
庭掃除
落葉の下に
ほころぶすみれ

MACHMILLER, Patricia J. (U.S.A.)

●
spring night
laughter trailing after
the last guests

マクミラー, パトリシア J. (アメリカ)

●
春の夜
客去りて残る
笑い声

Somiyaa (Inner Mongolia)

●
A night that makes no sense
the stars
naked

ソミヤー (内モンゴル)

●
腑に落ちない夜の
星々は
裸

Shevnee (Inner Mongolia)

●

Scattering snowflakes
sparrows descending
to herald spring

シヴネー (内モンゴル)

●

雪花散らし
舞い降りる雀
春を告げる

Bornood Khadaa (Inner Mongolia)

●

Tinkle, tinkle
the caravan's bell
softens the chill wind

ボルノード・ハダー (内モンゴル)

●

チリンチリン
キャラバンの鈴音に
寒風も和らぐ

Ba. Bold (Inner Mongolia)

●

Koma River woods
the crow and I
in our clumsy song

バー・ボルドー (内モンゴル)

●

高麗川の森に
烏とわたしの
不器用な歌声

HANSEN, Hanne (DENMARK)

●

flat broad feet
in clumsy black shoes
always same model

ハンセン, アナ (デンマーク)

●

平らで幅広の足
不格好な黒靴は
いつも同じの

MORTAZAFI, Milani S. Mohsen (IRAN)

●

awakened
by the dawn bird's song –
an open widow

モルタザフィ, ミラーニ S. モセン (イラン)

●

目が覚める
夜明けの鳥の歌でー
開いた窓

—— HI 選集 —— ②

安原 葉 (長岡)

●

客数多なるも静かや梅見茶屋

新田佐代子 (堺)

●

住職の言の葉優し冬日和

西邑桃代 (京都)

●

英国に学びしままで花散るか

佐藤宣子 (北海道)

●

深雪晴石狩川のやや真直

岡西宣江 (千葉)

●

振り袖を声を舞ひあげ歌留多会

時田 清 (深谷)

●

歯科院に大谷グッズ春近し

—— HI Club —— ②

YASUHARA Yo

●

Though many come,
the place stays quiet
a plum-blossom teahouse

NITTA Sayoko

●

Gentle words
from the temple priest ...
a mild winter day

NISHIMURA Momoyo

●

Have the blossoms fallen
while you study abroad
in England

SATO Nobuko

●

Sunshine after deep snow
the Ishikari River runs
nearly straight

OKANISHI Nobue

●

Furisode and voices
lift into the air —
karuta match

TOKITA Kiyoshi

●

A dental office
shows Ohtani merchandise —
spring is close

三好かほる（埼玉）

●

花菜畑ぬけていかるが法隆寺

MIYOSHI Kahoru

●

Slipping past
mustard fields:
Ikaruga, Horyuji

鈴木帰心（西尾）

●

倫敦の漱石短日の憂ひ

SUZUKI Kishin

●

Soseki in London —
the melancholy
of a short day

渡辺通子（日立）

●

一人ずつ物語もつ聖夜祭

WATANABE Michiko

●

Each of us
carrying a story —
Christmas Eve

大西政司（愛媛）

●

青褪めた平和の門に聖火灯す

ONISHI Masashi

●

The Olympic Torch
lit upon
the faded Arco della Pace

沼田博古（東京）

●

有明海の月食べ尽くす寒の海苔

NUMATA Hakko

●

Winter seaweed
eats up the moon
in the Ariake Sea

田中あき子（東京）

●

成人の日や胸のアクセルぐんと

TANAKA Akiko

●

Coming-of-Age Day —
the heart's accelerator pedal
kicked forward

羽野泰子（大分）

●

またひとつ戦のニュース命凍つ

HANO Yasuko

●

One more piece of war news —
lives
frost over

鈴木慕南（東京）

●

冬うらら鯉城通りのエキストラ

SUZUKI Bonan

●

Mild winter day ...
extras drift in
on Rijodori Street

清水暁子（北海道）

●

雪掻きのご褒美今日はチョコパフェ

SHIMIZU Akiko

●

After snow shoveling
the day's small reward:
a chocolate parfait

細川みちえ（愛知）

●

春陰や閉店決す再開発

HOSOKAWA Michie

●

Spring cloudiness —
the shop's closure decided
due to redevelopment

川口比呂人（鎌倉）

●

薫りなき花も雑ざりて春爛漫

KAWAGUCHI Hiroto

●

Scentless blossoms
mingling as well
in spring's full glory

逸見真三（千葉）

●

一献二献百薬の長夜長なる

HENMI Shinzo

●

One cup, then two,
the best of all medicines
— long night

西田梅女（金沢）

●

白山を正面にして野を焼けり

NISHIDA Umejo

●

With Hakusan
directly in front of us
burning the fields

菊池幸恵（茨城）

●

春めきて混み合つてゐる試着室

KIKUCHI Sachie

●

Fitting rooms
crowded —
spring in the air

筒井慶夏（沖縄）

●

旧正月良き名の川を鷺歩く

TSUTSUI Keika

●

Lunar New Year —
a heron walking
the well-named river

今泉かの子（名古屋）

●

青年へ薔薇売る老人ローマの昼

IMAZUMI Kanoko

●

The old one
selling roses to the young one ...
Rome at noon

大越碧流（東京）

●

廃線のとぎれとぎれや大花野

OKOSHI Hekiryu

●

The abandoned track
fading in and out —
a vast flower field

西倉ムツ子（深谷）

●

長生きの一人遊びに芹を摘む

NISHIKURA Mutsuko

●

Picking seri:
a solitary pastime
in my long life

安富明路（北海道）

●

春夕焼輝き始む四日月

YASUTOMI Akiji

●

Spring afterglow ...
the crescent moon
starts to shine

矢野真緋子（広島）

●

宍道湖の波バラ色に春夕焼

YANO Mahiko

●

On Lake Shinji
the waves turn rosy ...
spring sunset

須川 久（東京）

●

鳥雲に磁石北北東を指す

SUKAWA Hisashi

●

Departing for migration;
the compass points
north-northeast

田中由子（神戸）

●

草萌ゆる広場漕ぎ出す三輪車

TANAKA Yoshiko

●

Sprouting new grass field;
a tricycle
pedals away

福田ひさし（埼玉）

●

逆風につぐみ胸張り遠く見る

FUKUDA Hisashi

●

With a faraway gaze
a thrush lifts his chest
into the headwind

西上禎子（大阪）

●

浦島のごとしハワイに避寒のわれ

NISHIGAMI Teiko

●

Like Urashima
I escape to Hawaii
away from the cold

—— HI 選集 —— ③

介弘紀子（福岡）

●

烏瓜大樹を頼り高きへと

草野准子（東京）

●

性別も歳も不詳や着ぶくれて

古郡孝之（埼玉）

●

鎌倉の路地に迷へば花八手

和田 仁（秋田）

●

八方が花吹雪なり異人館

馬場吉彦（盛岡）

●

蛾の珍種二百十日の置土産

北端辰昭（奈良）

●

初時雨ふと会えそうな山頭火

—— HI Club —— ③

SUKEHIRO Noriko

●

Snake gourd
ever upwards
relying on a great tree

KUSANO Junko

●

Sex and age
hard to tell
puffed with layers

FURUKORI Takayuki

●

Lost in the lanes
of Kamakura
— fatsia in bloom

WADA Jin

●

Petal showers
from all directions —
the foreigner's residence

BABA Yoshihiko

●

A rare moth species:
a parting gift
from the two-hundred-tenth day

KITABATA Tatsuaki

●

First winter shower —
I might suddenly run into
Santoka

齋藤澄子（東京）

●

生け贄の子熊哀れや熊祭

SAITO Sumiko

●

lomante —
how pitiful
the sacrificed cub

田代まれすけ（静岡）

●

邯鄲の夢より醒めて冬銀河

TASHIRO Maresuke

●

Awakened
from a dream of fleeting glory
— the winter Milky Way

草刈幸風（東京）

●

天あをく好文木の浄土かな

KUSAKARI Kofu

●

Blue sky
the plum of learning in bloom
— pure land

原田静子（埼玉）

●

一本の着信を待つ二月尽

HARADA Shizuko

●

Waiting
for a single message ...
February ends

飯川三無（川崎）

●

大北風に絵馬飛び跳ねて嘶けり

IIKAWA Sanmu

●

In the great north wind
the ema leaps;
a sudden neigh

児玉星流（長野）

●

地層処分十万年後のスカスカ林檎

KODAMA Seiryu

●

Geological disposal —
a hollow apple
a hundred thousand years on

石綿久子（東京）

●

線香をまっすぐに立て桜餅

ISHIWATA Hisako

●

Placing
an incense stick upright
— *sakuramochi*

平井 葵（東京）

●

静かなる出舟入舟風の梅

HIRAI Aoi

●

Quietly
boats leaving, boats returning;
plum blossoms in the wind

相沢正志斎（水戸）

●

針穴に絡む糸屑針供養

AIZAWA Seishisai

●

Thread waste
tangled in the needle's eye —
Hari-kuyō

松村 實（千葉）

●

桜ちるオール揃ひて競ひゆき

MATSUMURA Minoru

●

Cherry blossoms falling —
with oars in unison
the boats race onwards

葛生みもざ（東京）

●

ホフマンの舟歌などを恋ふ三月

KUZUU Mimoza

●

Longing for
Hoffmann's *Barcarole*
this March

佐藤みちゑ（東京）

●

空磨くやうに窓拭く春の塵

SATO Michie

●

Wiping the windows
as if polishing the sky
spring dust

草野章次（浜松）

●

梅の花心の中の鬼を消す

KUSANO Shoji

●

Plum blossoms —
I banish the demon
from my heart

相沢恵美子（横浜）

●

媽祖廟の赤き蠟燭春立てり

AIZAWA Emiko

●

Mazu Temple
red candles flicker —
spring begins

坂田節子（埼玉）

●

軽トラが愛車になりて春うらら

SAKATA Setsuko

●

My kei truck
now my beloved car ...
balmy spring day

水田博子（広島）

●

嬰の重さ腕にありあり暖かし

MIZUTA Hiroko

●

The baby's weight
on my arms
a warm day

梶原夢乃（周南）

●

潮碧し緋毛氈めく落椿

SUGIHARA Yumeno

●

Deep blue sea —
fallen camellias lie like
a scarlet cloth

熊谷佳久子（札幌）

●

島の春白馬ゆつくり近づきぬ

KUMAGAI Kakuko

●

Spring on the island
a white horse
slowly approaching

耀 千秋（東京）

●

初日の出砂防林から映え初むる

YO Senshu

●

First sunrise
glowing through
the shelterbelt

神山姫余（栃木）

●

幼子の手足伸びたる春の夢

KAMIYAMA Himeyo

●

An infant's
limbs lengthening:
a spring dream

ちづこ（東京）

●

片栗の花を下山の標とし

CHIZUKO

●

Katakuri blossoms
I make them my markers
for descending the mountain

月城花風（東京）

●

ふらここや音の外れしハーモニカ

TSUKISHIRO Kafu

●

A swing —
the harmonica
out of tune

高橋紀美子（神奈川）

●

ラトゥールの主の手を透かす春灯

TAKAHASHI Kimiko

●

Spring lamp ...
it shines through
the Lord's hand in La Tour

権守いくを（神奈川）

●

野良に出て裸足で駆けよ春の土

GONNOKAMI Ikuo

●

Go out to the fields,
run barefoot —
spring earth

宮田 勝 (石川)

●

白鳥の鮮衣をひらく湖の面

MIYATA Masaru

●

The swan unfolds
a magnificent robe ...
the lake's surface

菊池恵海 (静岡)

●

滾る血の闇を破りて牡丹の芽

KIKUCHI Keikai

●

Rending the darkness
of seething blood
peony buds

菊池熱海 (静岡)

●

森息吹くニンフ舞ふかや新樹光

KIKUCHI Nekkai

●

The woods breathing,
nymphs dancing ...
new-leaf light

相木英人 (東京)

●

バンコク
盤谷の朝餉小皿の蘭一花

AIKI Hideto

●

Breakfast in the Bangkok
an orchid
on a small dish

(HI 選集①～③
村上博幸訳)

(HI club ①～③
Translation by
Hiroyuki Murakami)

【訂正】HI171号 P22に以下の誤りがありました。訂正しお詫び申し上げます。

HISANAGA Sachiyo

《誤》 Every winter night
my bones getting too sharper,
my sleep more painful

→ 《正》 Every winter night
my bones getting too sharper,
more painful to sleep

—— HI 選集 —— ④

飯田双樹（東京）

●

風吹いて蚊柱のごと枯葉巻く

結葉やよひ（神奈川）

●

竹林にうねり残して神渡し

陽 二（西蒲田）

●

フェリー行く三陸沖の夏の風

悟（愛知）

●

冬銀河疫の奪ひし鳥数多

望月吉々（北海道）

●

雪冠る菊を救いて仏花とす

久永小千世（知立）

●

冬の駅伝レース
ほら、かの赤レンガ建こそわが母校

—— HI Club —— ④

IIDA Soju

●

wind blows
swarming round
like a column of mosquitoes

YUNA Yayohi

●

The bamboo forest
waving a lot
autumn west wind

YOJI

●

Ferry cruise
farsea of Sanriku
in summer breeze

SATORU

●

Winter Galaxy —
myriad of fowls perished
by epidemic

MOCHIZUKI Yoshi-yoshi

●

Upas sirkamu
Kikukina ka ku=opas
San kotca=eare

HISANAGA Sachiyo

●

Winter running race —
Look, that red bricks on T.V.
my alma mater

松山芳彦（埼玉）

●

冬空の全き碧をふと不安

MATSUYAMA Yoshihiko

●

I suddenly feel uneasy
about the full blue
of the winter sky

末永玲子（北海道）

●

剪定の桜枝抱え夫戻る

SUENAGA Reiko

●

Pruned cherry branches —
my husband
coming home

池田松蓮（東京）

●

春ともしコーヒー豆を煎るあるじ

IKEDA Shoren

●

Tostaba café
un maestro
bajo un atardecer primaveral

山田由紀子（仙台）

●

声のみで存在示す勾鳥

YAMADA Yukiko

●

not seen but
certain of his song
bush warbler

小泉裕子（岐阜）

●

配達に声尖らせて孕猫

KOIZUMI Yuko

●

mewing in anger
at a delivery man —
pregnant cat

チョウコ ビーン（熱海）

●

また一つ齢重ねて春立ちぬ

BEEN Choko

●

another year
of age,
spring has come

木場澄江（鎌倉）

●

風に乗り薫るは梅か目をつむらん

KOBA Sumie

●

Riding on wind
ume blossoms' scent
let close my eyes

工藤眞一（東京）

●

しみじみと余寒の雨音響き初む

KUDO Shinichi

●

In aller Ruhe fängt
des Regens Rauschen in der Nachkälte
an zu tönen

慶 和（高松）

●

母の忌や風にふはりとミモザ咲く

KEIWA

●

Fluffy mimosa
blooming in the breeze
on Mother's death day

山戸暁子（堺）

●

椿落つ見事なるものから先に

YAMATO Akiko

●

Kamelienblüten —
die schoenste faellt zuallererst,
dann nacheinander

小上栄女（和歌山）

●

潜水の鵜を見失なふ春の川

OGAMI Shigejo

●

a diving cormorant
I lost sight of it
spring river

清水京子（愛知）

●

名を呼べば微笑む赤子桃の花

SHIMIZU Kyoko

●

a baby smiles
as called by her name
peach blossom

春木小桜子（大阪）

●

日だまりに恋の猫来て顔洗ふ

HARUKI Saoko

●

The cat in love
wash its face
in the sun

西川盛雄（熊本）

●

肥後つばき八雲旧居の時しづか

NISHIKAWA Morio

●

Higo camellia
escorting quietly
old house of Koizumi Yakumo

白根順子（埼玉）

●

会えば足る妹のゐて春の風邪

SHIRANE Junko

●

I have a sister
satisfied just by meeting
spring cold with cough

永井弘子（茨城）

●

うれしき日はうれしさうなる桜かな

NAGAI Hiroko

●

The happy day,
I feel the cherry blossoms
are happy too

乃万美奈子（愛媛）

●

若草から手水へ雀の身軽さよ

NOMA Minako

●

from young grass
to the high stone washbasin
sparrows nimbly

幸 湖（滋賀）

●

大和守る神の如くや雪の富士

KOUKO

●

Le mont Fuji recouvert de neige
est comme un dieu
qui défend le Japon

岡 哲夫（和歌山）

●

新しき靴を踏み入れ初電車

OKA Tetsuo

●

with brand-new shoes on
stepping onto the first train
of the New Year

各務恵紅（岐阜）

●

絵馬に雪願い半分隠されて

KAKAMI Keiko

●

Snow on votive horse tablets
hiding half
of their wishes

中村和江（深谷）

●

水温むラマダン明けを待つ少女

NAKAMURA Kazue

●

spring water warms up
a girl waiting for the end
of Ramadan

山本浪子（川崎）

●

学位受く老夫は杖と壇上に

YAMAMOTO Namiko

●

Graduation ceremony —
my old husband getting
Ph.D. with his cane

宮尾尊弘（つくば）

●

早咲の花見事なり途中下車

MIYAO Takahiro

●

Early-blooming flowers
worth a detour
on my way home

小松 萌（横浜）

●

白梅の風に撫でられ霧海の忌

KOMATSU Moe

●

wind caresses
the white plum blossoms
on Mukai's day

石澤幸子（京都）

●
花桜濃きも淡きも咲き始むる

ISHIZAWA Sachiko

●
cherry blossoms
beginning to bloom
in deep and pale

天野松男（福岡）

●
今年も土筆摘む 3 月11日

AMANO Matsuo

●
picking horsetails
this year again
March 11

内村恭子（東京）

●
水切りの上手くなりたる日永かな

UCHIMURA Kyoko

●
days getting longer
getting better
at skipping stones

(HI 選集④自訳)

— ご案内 —

第 2 回「俳句の夕べ」

昨年に引き続き、ルーマニアの俳人と日本の俳人の交流会を開催いたします。

記

日時：2026年10月25日（日）午後 5 時より

会場：駐日ルーマニア大使館

東京都港区西麻布 3 - 16 - 19

（日比谷線広尾駅 3 番出口より六本木方面へ徒歩約 7 分）

* 参加申込は、9 月20日（日）迄に国際俳句協会へ。定員になり次第締切ります。

* ご参加の方でご希望の方は、申込後に、俳句 2 句（日本語）をメールにてお送り下さい。

* 当日、入館の際、身分証明書の提示が必要となります。

申込先：国際俳句協会 Tel: 03-5228-9004 Fax: 03-5228-9007

Email: info_hia@haiku-hia.com

主催：HAIKU ガーデン 協力：国際俳句協会

—HI 172号 投句作品より / From HI No.172—

【選評】

HIA 理事 西村和子

Selection and review by Kazuko Nishimura, HIA Director

■第1位■

Bornood Khadaa (Inner Mongolia) / ボルノード・ハダー (内モンゴル)

Tinkle, tinkle / the caravan's bell / softens the chill wind

チリンチリン / キャラバンの鈴音に / 寒風も和らぐ

(評) 聴覚で捉えた作品。キャラバンの旅は真夏や真冬を避けるから、まだ寒さの残る日でも、その鈴音に気づくと春がすぐそこにやって来ていると実感する。同時に寒風の音も心なし和らいで聞こえる。季節の移り行きを、キャラバンの鈴音によって感じ取るとは、内モンゴル在住の作者ならではの感覚。共に風の中の鈴の音に耳を傾けよう。

A haiku captured through hearing. Caravans avoid traveling in the height of summer or winter. Even on still-chilly days, the author realizes that spring is just around the corner, by the sound of the bell. At the same time, the cold wind also seems to be softened in author's perception. Feeling the change of seasons through the sound of a caravan bell is a sensibility unique to someone living in Inner Mongolia. Let's listen to the sound of bells in the wind together.

■第2位■

山戸暁子 (堺) / YAMATO Akiko

椿落つ見事なるものから先に

Kamellenblueten - / die schoenste faellt zuallererst, / dann nacheinander

(評) 毎日のように愛でている椿の花。最も見事に咲いた一花を殊に大事に思っていたのに、先に落ちてしまった。惜しむ思いもさることながら、落椿となってもその見事さは損なわれないと想像させる。椿は花びらと芯がしっ

かり糊付けされているので、落ちても形が崩れない。色も鮮明さを保っている。見事に咲いていた時を惜しむだけの作品ではないと思われる。

The camellia flowers are that of the author admires almost every day. She especially cherished the one that bloomed most beautifully, yet it fell first. While there is a sense of loss, it also makes me imagine that even as a fallen camellia, its splendor is not diminished. Camellia petals and cores are firmly glued, so even when they fall, their shape doesn't collapse. The color stays vivid as well. This haiku doesn't seem to be only about lamenting the time when it was in full bloom.

■第3位■

草野准子（東京） / KUSANO Junko

性別も歳も不詳や着ぶくれて

Sex and age / hard to tell / puffed with layers

（評）たぶん女性の姿、と思わせる点におかしみがある。自画像かも知れない。おしゃれ心より防寒が大事とばかり、あり合うものを着重ねた結果、着ぶくれてしまった。地味な冬帽子をかぶって鏡を見たら、まさに性別不詳、年齢不詳。と言っても若くはないことだけはわかる。自嘲の思いも汲み取った方が、作品の魅力は増す。共感も得られよう。

There's something funny about this haiku, that it makes you think the one described here is probably a woman. It could be a self-portrait. Prioritizing warmth over fashion, the author piled on whatever she had, and ended up looking puffed up. Wearing a plain winter cap and looking in the mirror, it's truly hard to tell her sex or age. But you can at least imagine she's not young. Understanding a bit of her self-deprecating sense makes the haiku even more appealing. It can also make it more relatable.

■第4位■

SHIMANE, Marie Annette (JAPAN / U.S.A) / シマネ, マリエ アネッテ (日本 / アメリカ)

Clearing the garden; / Under all the old leaves - / Blooming violets

庭掃除 / 落葉の下に / ほころぶすみれ

(評) 日常の中の小さな気づきが俳句の種となり、ささやかな感動を呼ぶ作品となる。長らく落葉が降り積もるままだった庭の隅を、今日はきれいにしようと朽葉を取り除いたら、何と堇が咲き始めている。発見の喜びが伝わってくると同時に、老いた葉と蕾をもたげた小さな命との対比にも気づく。花盛りの堇ではなく、次の季節の兆を見出した点が貴重に思われる作品。

A small everyday observation becomes the seed for a haiku, creating a piece that evokes quiet delight. In a corner of the garden where fallen leaves had long accumulated, today she decided to clean up and remove the decayed leaves, and surprisingly, violets had just started to bloom. We can share her feeling of the joy of discovery, and at the same time, we also notice the contrast between the aged leaves and the small life pushing up as buds. It's not the violet in full bloom, but the emergence of a sign of the next season that makes this haiku special.

■第5位■

永井弘子（茨城） / NAGAI Hiroko

うれしき日はうれしさうなる桜かな

The happy day, / I feel the cherry blossoms / are happy too

(評) 桜の花でなくとも、見る者の感情が投影されるのはあたりまえと思われるかもしれないが、日本人にとっての桜の花は、人生経験をも炙り出す花なのだ。「うれしき日は」と詠っているが、その反対の「かなしき日」も当然ある。人生の折々に毎年見てきた桜に、様々な思い出が甦る。年齢を重ねるほどに、桜への思いが深まってゆく。そんなことを思わせてくれた。

Even if it weren't cherry blossoms, it might seem obvious that a viewer's emotions get projected onto what they see. But for the Japanese, cherry blossoms are flowers that bring out the experiences of life, as well. The author writes "on happy days", but of course, there are also "sad days". Every year, at different times in life, seeing cherry blossoms brings back all sorts of memories. The older one get, the deeper one's feelings toward the cherry blossoms grow. That's what this haiku made me think of.

* HI 投句作品の選評は、HIA 役員が順番に担当します。

* HIA directors will take turns in the selection and review of the haiku.

俳句が人の心をつなぐ

石狩市長 加藤 龍幸

石狩市の歴史は、豊かな自然と川の恩恵に深く根差しています。アイヌ語で石狩川を示す「イシカラベツ」（「曲がりくねって流れる川」あるいは「神様が作った美しい川」などの意味）に由来するこの地は、江戸時代初期から鮭漁とアイヌ民族の交易の拠点として大いに賑わいました。現在では石狩湾新港を擁する道央圏の工業・物流拠点へと発展しています。

その石狩湾では、冬の晴れた日、海の向こうに見える船や陸地が、水平線から浮かび上がるように見える、不思議な光景を目にすることがあります。これは「浮島現象」と呼ばれる蜃気楼の一種です。海面付近の冷たい空気層の下に暖かい空気層があると、光の屈折によって遠くの景色の一部が、まるで海面に鏡があって反射しているかのように見えます。そのため、船や陸地の下に空の一部が見え、あたかも宙に浮いているように見えるのです。

道央最古の俳句結社である「尚古社」を擁し、江戸時代末期から俳句が盛んだった石狩市では、その歴史的特色を活かし、毎年『俳句のまち〜いしかり〜』俳句コンテストを実施しています。今年で22回目を迎えてのコンテストの兼題は「蜃気楼」。日本全国から寄せられた多くの作品のなかから、「天位」に選ばれた俳句の句碑が、今年も弁天歴史通りに建立されることになっています。また、昨年は私が学長を務める「いしかり市民カレッジ」の主催講座として「初心者のための俳句教室」を開催しました。この講座では、石狩における俳句の歴史や俳句ゆかりの観光スポット、俳句のルールや作り方などがわかりやすく紹介され、受講者から多くの好評の声をいただきました。この講義のなかでは、自分の作った句を人に読んでもらい、評価や助言を受けることが上達につながるとの話がありました。つまり、俳句は人とのつながりのなかで育まれていくものだということです。

かつて俳句は、鮭漁で栄えた石狩の人々の心をつなぐ役割を果たしてきましたが、私は、石狩というまちが、人と人との輪が一つ、二つと広がり、その輪がさらに大きく育っていくまちであってほしいと願っています。

平成15年9月には、本町地区の弁天歴史公園内に貴協議会の初代会長である有馬朗人氏の句碑が建立されました。この句碑には石狩市の市花である「はまなす」を詠んだ句が刻まれており、石狩の自然をこよなく愛した有馬氏の心情を感じ取ることができます。

石狩市は、本年9月に市制施行30周年の佳節を迎えます。これからも、俳句によって結ばれた人の輪がさらに大きく広がることを願い、その実現に向けて歩みを進めてまいります。

後記

2026年度俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会と国際俳句協会の総会は、ベルギーから俳句愛好家として著名なヘルマン・ファンロンパイ氏を、またスウェーデンからラーシュ・ヴァリエ氏のお二人を招き「なぜ俳句に魅せられたか」をテーマに俳句シンポジウムを開催した。国際俳句交流協会とお二人とのご縁は今を去ること12年前の2014年1月に遡る。有馬朗人会長（当時）を団長に「欧州と日本の俳句の現状」のシンポジウムに参加する訪問団の会場探しに当時、駐日スウェーデン大使であったヴァリエ氏のご協力を頂いたことから始まった。氏は、駐EUスウェーデン政府代表部を会場に使わせて下さり、欧州7か国の俳人が一堂に集まったのだった。その会場に、現職のEU大統領でいらしたファンロンパイ氏は、ご自分に俳句への道を開いてくれたダグ・ハマーショルド国連事務総長の母国スウェーデンのEU代表部での開催に不思議な縁を感じると話された。

今回のシンポジウムで、ヴァリエ氏は俳句に魅せられたきっかけは、ストックホルムの高校生の時からの東洋文学への関心から始まり、鈴木大拙に影響を受けたことを話され、京都大学への留学が日本文学への傾倒につながったことを、ファンロンパイ氏は、現代社会に必要な要素は俳句の持つ簡潔さと調和にあると話された。氏の俳句を通して人として生きることにも寛容さが大切で、自然への小さなまなざしが世界の平和に繋がるという解釈は、同じ信念を持つ故有馬先生の遺志を継いで俳句のユネスコ登録を応援して下さっている。氏の俳句への哲学的な解釈は、日本の俳人にとって新たな発見であったようだ。会場となったベルギー大使館には160年続くベルギーと日本の交流の歴史を示すセピア色の写真が飾られており、都心の中心地とは思えない緑の庭園で、シェフ特製の料理やベルギービールを楽しみ、歓談の時間はあっという間に過ぎていった。

次の日は、お二人とも千葉県勝浦市の長秀寺でのファンロンパイ氏の句碑開きに参加された。句碑には「寛容の繋ぐ浜辺や平和の海」が英語と日本語で刻まれている。太平洋を見下ろす長秀寺の隣町御宿では、その昔、台風で遭難し難破したスペイン船の300数人を地元の海女たちが助けた逸話が語りつがれており、長秀寺は平和を祈るファンロンパイ氏の句碑にふさわしい場所となった。ファンロンパイ氏は、4日間の滞在の最終日、千葉大学から名誉博士号を授与された。「私たちは同じ嵐の中で同じ船に乗っている」と学生たちに語りかけられた。スウェーデンに帰国されたラーシュ・ヴァリエ元大使は完成間近な「日本文化への入門書」の執筆活動に余念が無い。

藤本はな

HAIKU INTERNATIONAL No.172	
定 価	1,000円（含年会費）
Price	年会費10,000円
発行日	令和 8 年 8 月31日
Date of issue	August 31, 2026
発行人	星野高士
	HOSHINO Takashi
発行所	国際俳句協会
Publisher	HAIKU INTERNATIONAL ASSOCIATION
住 所	〒162-0843
	東京都新宿区市谷田町 2-7 東ビル 7F
Address	7F AZUMA BLDG. 2-7, ICHIGAYA TAMACHI, SHINJUKU-KU, TOKYO 162-0843 JAPAN
電 話	03-5228-9004
Fax	03-5228-9007
表紙書	町 春草
cover calligraphy	MACHI Shunsō
翻訳委員	村上 博幸
translator	MURAKAMI Hiroyuki

送金口座名「国際俳句協会」

ゆうちょ銀行 振替貯金

00190-1-536945

三菱UFJ銀行 新丸の内支店(普)

1028936

一般会員：1万円

賛助会員 結社、団体：3万円

法人：1口10万円

(何口でも可)

ホームページアドレス

<https://www.haiku-hia.com>

俳句ユネスコホームページアドレス

<https://unesco.haiku-hia.com>

協会メールアドレス

info_hia@haiku-hia.com

送付先注意・裏面参照

Application Form for HI No.175 12月末日締切 deadline by the end of December 都道府県 または市町村名 country 俳 号 及びフリガナ pseudonym	
俳句1	
俳句2	
俳句3	
Address 住所	
Telephone 電話	e-mail
Full Name: 本名及びフリガナ	
SURNAME (in capitals), Given & Middle Names	
会員番号 Membership No.	

自訳された訳文の添削は申し受けないことに致しました。従いまして訳文は自己責任となりますのでご了承下さい。
Translations will not be edited. They will be published as received.

H は **I** い (第百七十二号) 俳句募集

◇ 応募資格 当協会会員に限る

◇ 作品 未発表新作に限る

◇ 締切 二〇二六年十二月末日厳守、末日消印有効、以後は一切不可。

◇ 発表 H I 第百七十五号

◇ 入選作に外国語訳をつけます。御自分で外国語訳をつけて下さることを歓迎します。但し、その添削は致しません。

◇ 原稿送付先 国際俳句協会事務局

(〒162-0843 東京都新宿区市谷田町二丁目 東ビル七階)

RULES OF APPLICATION FOR HI No. 172.

All members of HI may enter two haiku (new ones only) for HI NO.175. Please send your haiku to the Editorial Room of HI, c/o HAIKU INTERNATIONAL ASSOCIATION Azuma Building 7F, 2-7, Ichigaya Tamachi, Shinjuku-ku, Tokyo 162-0843 Japan by the end of December 2026.

Please use the APPLICATION FORM on the reverse side, and print all letters.

In writing your name, please write the surname first in capitals like SHAKESPEARE, William.

special supporting members

特別賛助会員

Associations, Corporations and Kessha indicated below support our aims and extend their fullest cooperation to our activities.

下記の団体・企業・結社には、当協会の活動趣旨に賛同いただき
格別のご協力をいただいております。

Associations 団体

Association of Haiku Poets	(公社)俳人協会
Association of Japanese Classical Haiku	(公社)日本伝統俳句協会
Modern Haiku Association	(一社)現代俳句協会
The Tokyo Club	(一社)東京倶楽部
Scandinavia Japan Sasakawa Foundation	スカンジナビア・ニッポン ササカワ財団

Corporations 企業

ALL NIPPON AIRWAYS CO.,LTD.	ANA 全日本空輸株式会社
JAL FOUNDATION	(公財)JAL財団
KADOKAWA CULTURE PROMOTION FOUNDATION	(公財)角川文化振興財団
KODANSHA LTD.	株式会社 講談社
The office of Ito En "Oh-I, Ocha!" New Haiku Contest	伊藤園お〜いお茶 新俳句大賞

Kessha 結社

「阿蘇」	主宰	山下しげ人	「諷詠」	主宰	和田華凜
「花鳥」	主宰	坊城俊樹	「風の道」	主宰	藤井稜雨
「耕」	主宰	加藤耕子	「香雨」	主宰	片山由美子
「沖」	主宰	能村研三	「世界モンゴル俳句会」	主宰	富川力道
「玉藻」	主宰	星野高士	「天為」	師系	有馬朗人
「若竹」	主宰	加古宗也			

(Alphabetical Order)

平成九年十二月八日第三種郵便物認可
令和八年八月三十一日発行（季刊発行）

H I 第百七十二号

秋分